

京みやこに向むかかふ路みちの上うへにして、興きように依よりて予あらかじめ
作つくる侍じ宴えん応おう詔せうの歌うた一首 并あはせて短たん歌か

四二五四番

あきづ島しま 大和やまとの国くにを 天雲あまくもに 磐舟いはふね浮うかべ 艫とも
に舳へに ま櫂かいしじ貫ぬき い漕こぎつつ 国見くにみしせし
て 天降あもりまし 払はらひ平たひらげ 千代ちよ重かさね いや継つぎ
継つぎに 知しらし来くる 天あまの日ひ継つぎと 神かむながら 我わ
がおほ君きみの 天あめの下した 治をさめたまへば もののふの
八や十そ伴ともの緒をを 撫なでたまひ 整ととのへたまひ 食をす
国くにも 四よ方もの人ひとをも あぶさはず 恵めぐみたまへば
古いにしへゆ なかりし瑞しるし 度たびまねく 申まをしたまひぬ
手抱たむだきて 事ことなき御代みよと 天地あめつち 日月ひつきと共ともに
万代よろづよに 記しるし継つがむそ やすみしし 我わが大君おほきみ
秋あきの花はな しが色々いろいろに 見めしたまひ 明あきらめたまひ
酒さかみづき 榮さかゆる今日けふの あやに貴たふとさ

反歌一首

四二五五番

秋あきの花はな 種々くさくさにあれど 色いろごとに 見めし明あきらむる
今日けふの貴たふとさ